



沖縄の歴史と地理的条件を踏まえて国際協力のあり方を探ったNGO会議＝メルパルク沖縄

NGOサミット
沖縄会議

沖縄は国内拠点に最適

ネットワークづくり急務

地域からの国際協力 沖縄のNGOは、いま一歩を踏み、「国際貢献NGOサミット沖縄会議」主催・アジア医師連絡協議会が二十四日夜、那覇市のメルパルク沖縄で開かれた。大交

易時代の歴史、全国有数の移民県としての沖縄は肩ひじ張らずに外国の人々と交流を重ねてきたことから国際化が最も進んでいるとNGO(非政府組織)の国内拠点に最適地との指摘がされる一方、交流をしている団体相互の情報交換の場が

少ないとして、ネットワークづくりを急ぐことを確認した。シンポジウム形式で行われた会議には市民約百人が出席。パネリストには県内から沖縄タイムスの由井晶子論説顧問、琉大医学部の岩永正明教授、高里鈴代那覇市議、詩人の高良勉さん、海外からネパールのラメシユワール・ポカレルさん、バンクグラデシユのアラディン・マハメッドさんの六氏が参加した。

パネリストは、自国の実情を「文盲率が高く、子供たちを学校に行かそうにも重要な労働力となっていて難しい」「きれいな水を確保し住民が病気になる対策が最重要」と説明、「外国からの援助は、これらの人々に恩恵をもたらすまでにならないケースが多い」と指摘して援助される側の水準に合わせた協力が求められている、と強調した。

アジアに最も近い地理的条件が気さくな交流を可能にしている」と指摘。さらに「四、五十代の人ならだれでも、外国から援助されたことを覚えていられる。開発途上国の現状を見れば手を差し伸べようと思うのは当然」と述べた。

外国との交流組織だけでも数十はあるとされる沖縄の課題としては、個々で活動している団体の連合体をつくるまでではなくとも、相互に情報交換を行う場の設置が不可欠との意見が相次ぎ、ネットワークづくりを図ることで、より役に立つ国際協力が可能になると確認した。

沖縄県民の国際協力について県内のパネリストは、日本本土にない歴史、東南